

植民地研究と「出会い損ね」について

東京大学大学院言語情報科学専攻

邱政梵

私は植民地台湾を中心に日本語文学を研究している。ここ数年、韓国や台湾の研究者が相次いで戦前の台湾と朝鮮を並べて論じる研究を出版している。陳佩甄『愛の文化政治：台韓現代親密関係の植民系譜』（政治大学出版社、2023年）や申知瑛『コロニアル・エンカウンター 比較に抗して』（勁草書房、2024年）などがそれだ。興味深いことに、これらの研究は期せずして、ともに植民地台湾と植民地朝鮮の「出会い損ね」から思考している。どういうことだろうか。

戦前の帝国日本における複数の植民地を並べて、同時に研究することは、1990年代から注目された「帝国史」の研究によって深められた。駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）がその代表の一つだ。この研究は、従来のように特定の植民地と帝国の関係を問うスタイルではなく、帝国内部の複雑な相互関係に着目し、朝鮮、台湾、「満州国」、占領地における日本の文化政策を同時に論じた。しかし、これらの研究は日本の「外地」を見渡す視野を提供しているが、植民地の側に立って、台湾が朝鮮を、朝鮮が台湾をどのように見ていたのかについて分析を行ったわけではない。「外地」に住む人たちの能動性が比較的に見えづらかった。陳や申の研究は、まさにその点に異論を唱え、あり得たはずの繋がりを求めるものだった。

しかし、その作業は決して簡単ではなかった。陳がベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」をもじって、「想像されない共同体（unimagined communities）」で台湾と朝鮮の関係を称したように、両者の関係を示す資料はそもそも少ない。また、その限られた資料の中でも、申が紹介したように、台湾の雑誌における「朝鮮特輯」に朝鮮人著者がいなかったことや、内地の雑誌における国語創作特輯に朝鮮人作家が取り上げられたのに台湾人作家が注目されなかったなど、帝国日本における二つの植民地の関係は、時折アンバランスなものであった。植民地の者たちは内地の視点を内面化して互いを見たり、そもそも相手が視野に入らなかったりして、「出会い損ね」ていたのだ。実証的な研究の視点からすれば、「あった」ものの分析ではなく、「出会い損ねた」ものを分析し、乗り越えることは、とても挑戦的であろう。「抵抗」や「協力」などの結論が先立つ危険性や、解釈の恣意性の問題が常に付きまとう。

それなら、彼女らはどのような方法論でこの難問に挑んだのだろうか。陳は、台湾と韓国を「想像されない共同体」と規定しつつ、その規定自体を一種の「政治的介入」とみなしている。台湾と韓国におけるナショナル・アイデンティティの形成は平行線を辿ってきたが、両地の同時代のテキストを並置して論じることで、互いに対する共感（sense of likeness）の可能性を見出す。申は、フランツ・ファノン

の「ニグロとは比較である」という主張から「比較」の方法論を拒否し、森崎和江、崔一秀、金時鐘を引用しつつ、「他者は別の他者と比較なしに出会えるのか」という問いを立てる。「マイノリティなどの中から比較できない特異性を見出すことで、その特異性を保持しながら共存する」可能性を読み取るという。

「共感」「共存」など、アクチュアルな概念がこれらの研究の核心にある。現代では、マイノリティグループの分断が社会問題となることも多いが、これらの研究は互いに想像することが難しくなったマイノリティの間に、「共感」「共存」の可能性を見出す一つの実践でもあるだろう。結局、同時代に対する人間の想像力が有限なのかもしれない。そうであるなら、歴史からそのような可能性を読み取ることは無意味ではないはずだ。ある意味、歴史の空白である「出会い損ね」を思考すること自体が、その空白を埋め、「出会い」を生み出すことなのだから。